

## 4. ヨセフ物語：夢見る者

命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。

——創世記 45：5b

聖書には夢の話が少なからず出てくる。日本でも古来、夢で神仏の「お告げがあった」という話は少なくない。フロイドやユングに代表される精神医学あるいは深層心理学における夢の分析は措くとして、夢に超自然的な意思を感じ、人生を占うのはいつの世にも変わらない人の常とすべきか。「夢、幻のごとし」という言葉は人生のはかなさを表すものとして用いられるが、「I have a dream (わたしには夢がある)」とマルチン・ルーサー・キングが語ったその夢は、神に望みを置く人の不屈の精神と活動を支える大きな力の源として今も多くの人々に深い感銘と共感を与え続けている。

聖書において夢は多くの場合、預言と同じように神の啓示として語られ、用いられている。夢を見るものは同時に夢を解くことも出来た。双璧はバビロンの王ネブカドネツアルの夢を解き、捕囚の身でありながら、バビロン全州を治める長官として王に重用されるに至ったダニエル書の主人公ベルテシャツアルことダニエルと本稿の主人公ヨセフであろう。聖書の時代から考えると両者の間には大きな開きがあり、後者はイスラエルの前史に属し、前者は所謂「バビロン捕囚期」直後がその背景となっているが、何れも夢を契機に歴史を導く神の支配と啓示について、また信仰が醸成する従順と自由について、これほど深い示唆を与えてくれる物語はない。波乱万丈に満ちたヨセフの生涯を貫いて聖書がわたしたちに語りかけているのは、単なる夢や夢の解き明かしではない。ヨセフの異能や衆に優れた能力、悲劇を幸運に変えた信仰的英知と言うより、ヨセフという人物を通して表された神の遠大な救いのご計画に他ならない。

それにしても、ヨセフ物語は親子・兄弟の愛憎や宮廷の人間関係なども織り交ぜて、注釈抜きで面白い。一介の羊飼いの少年が父親の偏愛のゆえに兄たちの妬みを買ひ、隊商に売られて遠くエジプトで、そこでも様々な試練に見舞われながら、ファラオ（エジプト王）の夢を解いたことから、宮廷に迎え入れられ、遂にエジプトの宰相にまで上り詰める。その経緯を辿るだけなら、類い稀な「立身出世物語」とも言えるが、創世記編集者の意図がそのようなことにあるはずもない。

ヨセフ物語は創世記の中でも群を抜いて多くの章節が用いられている。信仰の父と称えられるアブラハム（アブラム）が9章、その子イサクが6章、そしてイスラエルという名を与えられ（創世記 32：29）、いわゆるイスラエル 12 支族の事実上の父祖であるヤコブに 10 章が割かれているのに対して、ヨセフ物語はユダとタマルについて記された 38 章を除いても 13 章と群を抜いている。

余談だが、新約聖書の冒頭に記されている「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」にはヨセフもその子エフライム、マナセの名もない。ヨセフの4番目の兄、長兄のルベンと共に後述

のようにヨセフの助命を図ったユダが「タマルによってベレツとゼラを…」と記されていることは興味深い。

ヨセフの劇的な生涯は創世記 37～50 章を読めば、特段の説明は不要だと思う。父親の寵愛を一身に浴びていたヨセフが兄たちから疎まれたばかりか、殺意すら抱かれ、猛獣に襲われて死んだかのように繕われてエジプトへの隊商に売られたことは 37 章に記されているが、同章ではヨセフは兄たちから「夢見るお方」と呼ばれている。そこには揶揄的な響きより強い敵意がみられる。日頃から父親の偏愛のしるしとも言うべき晴れ着を身に着けている弟への反感だけでなく、父母を含めて兄たちが自分にひれ伏していることを明らかに示す夢を臆面もなく兄たちに語って憚ることがなかったヨセフは天真爛漫なのか、父親の寵愛を鼻にかけて兄たちを見下すような傲岸不遜な態度に終始していたのか、何れにせよ、そのようなヨセフを快く思わないばかりか、亡き者にしようとした兄たちの怒りは本来、父親に向けられて然るべきものであるが、そうもできずに弱い者に向けられるのは古今東西を問わないし、「兄弟も他人の始まり」と言うことなのか。しかし、ヨセフ物語の主題は人間の愛憎劇にではなく、人の思い、人間の愛憎を超えて働く神の救済史にあると言うべきだが、前述のように物語自体は起伏に富むが難解なものではない。詳細は聖書本文に譲るとして、ここでは各章ごとの要約を試みることにする。

隊商に売られ、エジプトに連行されたヨセフはファラオの侍従長ポティファルに買われて彼の奴隷となるが、持ち前の才気から主人の寵を得て、瞬く間に全財産を任される家令に身を置くまでになる。聖書は「主が共におられたので」「主が彼のすることをすべてうまく計らわれたので」(39:2～3)と述べることで、ヨセフ物語の主役がヨセフ自身ではなく、神ご自身に他ならないことを明らかにするが、「好事魔多し」と言われるように、ヨセフはポティファルの妻の誘惑にさらされる。才知に長けていただけでなく、眉目秀麗な青年であったに違いない。ヨセフは誘惑を退けるが、逆恨みしたポティファルの妻の讒言で投獄されてしまう。しかし、獄中でも看守長に目をかけられたヨセフは、一切を任されるようになる。創世記はここでも注意深く「主が共におられたので」と語っている。(39 章)

ヨセフは夢を見ただけではなく、夢を解く力を与えられていた。彼が投獄された後、王の給仕役と料理長がファラオの怒りを買って入獄。二人それぞれに不可解な夢を見る。それぞれの夢を解いたヨセフの言葉通りに一人は許され、一人は断罪されることになるが、前者に対して自らの身上を明かし冤罪を訴えて、釈放されたときに囚われの身から解放されるように口をきいてほしいという頼みにもかかわらず、復帰できた王の給仕役はそのことをすっかり忘れてしまい、二年間が空しく過ぎてしまうことになる。(40 章)

ファラオが不可解な夢を見た。7 頭の牛が肥えた 7 頭の牛を喰いつくし、干からびた七つの穂が良く実った七つの穂を飲み込んだ夢を見たファラオは心穏やかではなく、国中の魔術師や学者を招集し

て夢を解かせようとするが、誰も解き明かすことは出来なかった。その時、給仕長がヨセフのことを思い出して、ヨセフは王の夢を解くために王宮に呼び出される。そして「七年間の豊作の後に七年の飢饉が到来する」ことを告げ、適切な措置を進言するヨセフに感嘆したファラオは彼を宰相に任じ、最高の栄誉と権限を与えて飢饉の備えに当たらせる。豊作の七年間、エジプトの國中至るところに有り余る食料が蓄えられ、その後の七年間続く飢饉にも人々は飢えることなく、生活を楽しむことができた。飢饉はエジプトだけではなかった。世界各地から食物を買い求める人々がヨセフのもとを訪れたのである。(41章)

食料を求めて外国からはるばるヨセフのもとを訪ねてきた人々の中に、ヨセフの兄たち10人がいた。ヨセフの唯一の同腹の弟であるベニヤミンの同行はヤコブが許さなかった。ヨセフを失った心の痛手は20年余を経てもヤコブから消え去ることはなかったに違いない。ヨセフは食料を買い求めに来たのが兄たちだと気づいていたが、兄たちが気づかなかったのは当然だろう。ヨセフのことは忘れてたかたに違いないし、エジプトの権力者が弟だと思はずもなかった。ヨセフは敢えて身の上を明かさず、国情を探りに来たスパイの嫌疑をかけて、拘束する。そして密かに自分たちのヨセフに対する所業と父親の悲嘆を思う心情に触れて、弟ベニヤミンを連れてくることを条件に、代金として支払われた銀貨を食料の袋に入れて、兄たちを父のもとに送り返す。(42章)

飢饉は続き、蓄えの食糧もなくなったヤコブは兄たちを再度、エジプトに送る。ヤコブの強い反対にもかかわらずベニヤミンを伴ってヨセフを訪れた彼らを歓待したヨセフは、彼の銀の盃をベニヤミンの袋に入れて、一行の後を追わせベニヤミンを拘束する。それに対してユダが兄弟を代表して、彼らがヨセフにした仕打ちや父の深い嘆きを訥々と訴えて寛恕を求める。43～44章は懐かしい思いを隠して、兄たちの心情を探ろうとするヨセフの策略ぶりが目立つが、それもまた父、兄弟への熱い気持ちの現れと言うべきであろう。(43～44章)

兄たちの心情、ことにユダの言葉にヨセフは「もはや平静を装っていることができずに」同席の人々の退去を求め、兄たちだけに「わたしはヨセフです」と自分の身を初めて明かす。茫然自失するかのよう<sup>ぼうぜんじしつ</sup>に驚く兄たちに語った言葉はきわめて印象的だ。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです」(45:4～5)。ヨセフ物語の中心的なメッセージが<sup>こゝこゝ</sup>此処にあると言っても良いと思う。人間の過ちや失敗すらも用いて救いの道を開いてくださる神の深遠なご計画と愛を思うのである。国の内外を通して復讐劇<sup>ふくしゅうげき</sup>があたかも当然であるかのように繰り返され、テレビ番組をにぎわしているかのような昨今の世情を思うにつけて、このヨセフの言葉は万鈞<sup>ばんきん</sup>の重みを持つと言うべきであろう。

ヨセフの兄弟のことはファラオにも伝えられ、彼らはファラオから破格の厚遇を得、更に父親のヤコブも呼び寄せられてファラオに<sup>はいえつ</sup>拜謁。その家族はエジプトで満ち足りた生活を送るようになる。エ

エジプトにおけるヨセフの多大の貢献が<sup>あずか</sup>与って力あるものだったことは言うまでもない。(45～47章)

48～49章はヨセフの子らと息子たちへのヤコブの祝福とエジプトでのその死が語られている。さらに50章のヤコブの埋葬と兄たちに対するヨセフの「<sup>ゆる</sup>赦しの再確認」で創世記は幕を閉じる。ヨセフ物語の主人公は当然、ヨセフであり、その数奇な人生は繰り返すまでもなく、まるで小説を読んでいるかのように<sup>きょうしゆ</sup>興味尽きないものがある。しかし、創世記は天地万物、そして人間の創造物語に始まって、神の人類救済史の担い手としてのイスラエルに集約されていくことになる。そのような視点から見るとヨセフ物語は、ヤコブ（イスラエル）物語の中に<sup>ほうせつ</sup>包摂されていると言っても差し支えないだろう。(48～50章)

ヨセフ物語で創世記は終わるが、それは同時に「出エジプト」、神の契約の民としてのイスラエルの苦難と希望の旅立ちへの序曲でもあったのである。